

# 隙間をうめるデザイン

## Design that makes up for gaps

温井 亨

NUKUI Toru

The reason of the chaotic characteristics of landscapes and cities in Japan is the absence of total planning and design. Therefore, to get the quality of cities and rural areas and to enjoy the beautiful landscapes, it is necessary the big change to reform the total system. In this paper I report my three works I had started not to wait the reform of the total system. I began with what I could. The title of this paper, "design that makes up for gaps" is the concept I found out reevaluating my works in this occasion. I think that the chaos of Japanese landscape is derived from the system in which each element of cities and rural areas is made except to consider its circumstances and totality.

In the work of the graduate school building of Tohoku University of Art & Design I made up for the gaps by proposing the site plan, control of the height, the design of group form, and total interior designs with furniture. In Kawamae Wharf of Mogami River, the local committee made up for the unsuitable plan by the counterproposal I designed. The preservation of the building of the Dai-ichi Elementary School of Yamagata City is the new thought that made up for the conventional thought not having evaluated historical architecture as cultural assets.

デザインも芸術も、一般にその評価は作品としての出来栄えで行われるのが常である。だが仔細に検討すると、良い作品が生まれるには、それを成り立たせている場がよく整っている前提のあることが見えてくる。そうした中でこそ十分力を発揮できるものだからだ。

しかし、社会が必要とするものには、しばしばそのような出来上がった場の隙間にこそ生まれるものがあるのではないか。

### 1. はじめに

我が国は世界第二位のGDPを誇り、国民一人当たりの所得も高い。しかし、それにもかかわらず、我々は豊かで魅力的な都市空間を享受しているという実感を持てないでいる。また、目を都市の外に転じても、調和のとれた美しい田園風景を目にするのは難しい。その理由としてしばしば挙げられるのが、都市や田園を形づくる個々の要素が、自らの中だけに完結した形でつくられ、全体との関係が十分考えられていないことである。もちろん周りとの機能的な最低限の関係は満たしているのだが、それだけに終わっているが故に、眞の豊かさや魅力が成り立たず、我々は風景として美しいと感じ取ることができない。

2004年に日本建築学会が「都市建築の発展と制御」という特別調査委員会を設け、数年にわたって取り組んだ活動は、まさしく同じ問題意識に立っていた。そこでは、個々の建築の集積が豊かな都市空間を実現できない現状を変えるために、「都市建築」という新たな概念を論じている。

一方、日本造園学会が1993年に学会誌で組んだ特集「造

園家（ランドスケープ・アーキテクト）に期待する」では、個々バラバラに行われている建設活動に、全体としての秩序を与えるべき職能が望まれていること、あるいは事業全体のグランドデザインを担う職能が望まれていることが論じられている。そしてそれが日本にない職能であり、今最も必要とされている職能であることが語られている。

筆者は本学で造園教育を担当し、また都市建築の発展と制御に関する特別調査委員会には委員として参加したが、我が国の都市や田園が調和のとれた美しさを持てるようになるためには、大きな困難を感じざるを得ない。社会通念から法制度までの大幅な改革が必要だと考えられるからである。では、改革が成就するまで待つか。

以下に挙げる3つの事例は、いずれも筆者が山形で関わり、さきやかな実践を試みたものであるが、上記の問題意識のもとに、しかし、改革の成就を待ってからではなく、やれるところからやれる範囲で行った活動である。「隙間をうめるデザイン」は、今回こうした活動を見直すなかで見つけた概念であり、隙間をうめるとは、個々に自己主張するだけで、全体との関係、まわりとの関係を考えないデザインの隙間をうめるという意味から考えたものである。

3つの事例の中には、インテリアや建築の保存を扱ったものがあり、また、活動の在り方自体に焦点を当てたものがあるが、その意味については、最後の「まとめ」で触れたい。

## 2. 東北芸術工科大学大学院棟、石彫棟(1995年、1996年)

本学大学院棟は、1995年、大学院設置に伴い建設された。筆者の関わりは当初事業のなかでオーソライズされたものではなく、文部省申請用の間取りを1週間で描いてくれと事務局より頼まれたことに始まる。当時大学にはキャンパス委員会もなく、キャンパス内外の土地利用、景観などを総合的に捉えて配置を考えるランドスケープの視点が不足していた。そこで不足分を補い基本設計をしたところ、それが採用されることになり、それ以後実施設計と監理を受注した本間利雄設計事務所に協力して設計監理に係ることとなった。以下の(1)～(4)は

筆者が不足分と考えたところであり、その作業が本論で言う「隙間をうめるデザイン」である。また、翌年依頼を受けた石彫棟の設計について(5)で説明する。

### (1) サイトプラン

写真1は、エスキス用の敷地模型であり、実施案とほぼ同じサイトプランとなっている。3棟の建物のうち最も大きな建物が演習棟、それに次ぐ建物が大学院棟である。当初、事務局より指示された配置は、演習棟の延長上に駐車場をつぶして建てるという計画で、駐車場不足の本学の状況を考えると良い計画とは言えなかった。そこで駐車場を残し、写真1のように3棟で駐車場を囲む新たなサイトプランを提案した。



写真1 サイトプラン (模型制作：本間利雄設計事務所)

### (2) ランドスケープとの調和ーとくに高さー

山形盆地を取り囲む斜面にキャンパスを持つ本学は7階建てのシンボリックな本館を持っている。市街から見て際立つよう意図されているのだが、それは逆に市街を取り囲む青垣、斜面緑地の景観を損なう結果ともなっている。また、屏風のように聳え立つことで、それまで美しい眺望景観を享受していた背後の民家から眺めを奪う結果となった。ランドスケープの視点が欠如していたためである。

ところで大学院棟の設計では、駐車場を残すために、東側の一段高い整地されていない斜面を敷地とした。そこで問題となるのが高さである。普通に設計すると背後の民家の眺望を奪うことに繋がりかねない。そこから大学の背後、集落で最も高い地点に建つ耕源寺に赴き、鐘楼に上り検討した。そして、開学時の失敗を繰り返さないよう、高さは隣りの演習棟の高さと等しくすることとした。

写真2は大学院棟の外観である。1階部分が半分地下に埋まっている。それは駐車場を残すために斜面への配置を選択したからであり、そして同時に、高さを既存演習棟と同じものとして課したからである。そこから、こうした形態が生まれた。



写真2 1階半分が地中に埋まる大学院棟

### (3) 群としての造形

建築家は自己のデザインの独自性を主張しがちであるため、キャンパスもしばしば万国博覧会場のようになってしまう。本件では逆に、あたかも新築棟が、当初から存在したかのように思われるよう既存建築群にあわせた外観とした。



写真3 大学院棟と演習棟

写真3は、手前が大学院棟、奥に見えるのが演習棟である。ただし、これは写真1の演習棟ではなく、より低

い位置にある同じ形をした別の学科の演習棟である。こうして見ると、大学院棟が既存キャンパスによく溶け込んでいるのがご理解いただけるだろう。

### (4) 内部空間と家具設計

外観が同じである分、内部が異なると強い印象を与える。既存演習棟は中廊下型のプランであり、2階廊下にはトップライトからの光が射すが、1階廊下は暗かった。一方、大学院棟は、高さを抑えるために屋階を設け、1階、2階、屋階という3層になっているが、写真4のように屋階廊下を空中に浮いたようにして両側にスリットを設け、トップライトの光が2階まで落ちるようにした。その結果、2階は光に満ちた空間となった。1階は半分地下に埋まっているので床面積は半分であり、屋外に面した片廊下型のプランであるので廊下は明るい。



写真4 トップライトと屋階廊下



写真5 大学院生室と家具ユニット

既存演習棟の机、ロッカーなどは、建築工事費とは別の備品購入費でメーカーのスチール家具を購入している。大学院棟においてもそのような予算措置が取られていた。しかし、建築と一体のものとして家具も設計した方が魅力的な空間がつくれるのと、つくりつけの家具工事によって、インテリアの質を高めることができるとの判断から、備品工事費で机、本棚、そして写真5にある間仕切りを兼ねた家具ユニットを設計した。

写真5は、窓側が吹き抜けになっている大学院生室の内観だが、右手に見えているのが家具ユニットである。写真では本棚が見えているが、裏側は洋服掛け、ロッカー、傘立てになっていて、これ自体が廊下側天井の低い部分の間仕切りになっている。大学院棟は現在用途

が変わり、写真5の空間は4つの大学院生室をあわせた大演習室となっているが、家具ユニットを取り外すことで容易に移行ができた。

写真6は、大学院生室のためにデザインした2種類の机のうちの1つである。こうした仕事は、都市や田園の風景をつくるということからは外れているが、オフィス・ランドスケープという言葉があるように、別々に発注される弊害の隙間を埋めることで、全体としての環境の質を高めることに貢献できたと思っている。

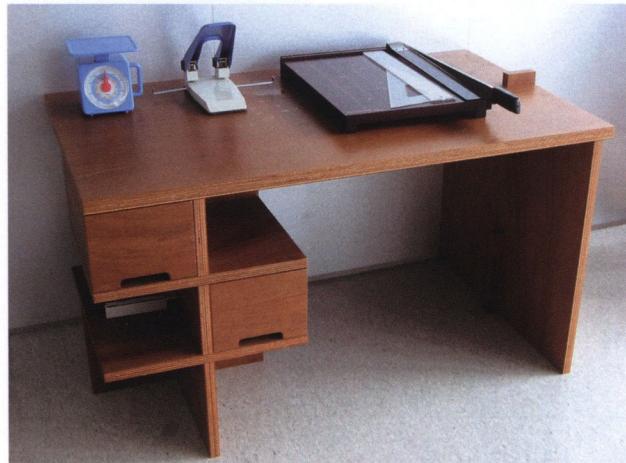


写真6 大学院生室のための机

#### (5) 石彫棟の設計



写真7 新実習棟と石彫棟

翌年、大学より石彫棟の設計依頼を受けたが、ここでも、独創性を追求して自己主張の強い建物とすることではなく、周囲のランドスケープに溶け込む建築とすべきだと考え、既存新実習棟の建築群と同じ構法、外観をとった設計とした。写真7は、既存の新実習棟と石彫棟である。まん中の小さな建物が石彫棟である。



写真8 石彫棟外観



写真9 テントとディテール

一方、使いやすい建築するために、石彫教員からここで行う作業、使用する機器の聞き取りを行い、それに合わせて空間化した。使用者から使い方を聞いて設計するのは当たり前のことであるが、東北芸術工科大学においては初めてのことであり、これも隙間をうめる作業と言えよう。聞き取りから、石彫は石の粉が飛び散るため、冬でも開口部を開け作業することが分かり、写真8のよう、2階サッシを省くテントによる庇という外観が生まれた。写真9は、そのディテールである。写真のようにテントの下には何もなく、室内外はつながっている。テントを通して柔らかい光が室内に広がり、換気は申し分ないが、温度環境は全く調整できない。これは石彫という独特の作業環境から生まれた形態である。周囲の建築群との調和を図りながらも、使用者と話し合いから石彫の特徴を表す外観を実現できたと思っている。また、それは同時に工事費の節約にも繋がっている。

### 3. 最上川の川前船着場（1999年）

建設省新庄工事事務所が、大石田町にある最上川の川前觀音前に船着場を計画し、町が協力、町民、学識経験者からなる検討委員会がつくられた。図1は、第1回委員会に示された計画案である。この場所、そして機能から考えても壮大すぎる石段を持つものであり、町の登録文化財にもなっている川前觀音前の風景を損なうものとして委員から反対意見が出された。通常、委員は意見を述べるだけであり、それを受け修正案をつくるのは設計案を諮詢している工事事務所であるわけだが、町が文化財登録している美しい風景の中に、その特徴を把握して新たに船着場を挿入するという作業は、工事事務所にも、そこから発注を受けている土木コンサルタントにも難しいと思われた。日本の土木では近年ようやく景観教育、デザイン教育が一部の大学で行われるようになり、河川法も改正されたが、これまで土木における学問実務は構造設計や機能の検討であり、こうした視点はなかつたからである。



図1 最上川の川前船付場第1案（建設省新庄工事事務所）

そこで、反対委員たちは自主的に、当初の予定になかった調整会議を2度追加して開き、自ら対案を出し、検討作業を行った。写真10は、筆者が出した対案に基づく検討により完成した船着場である。川前觀音堂への参道としての考え方、護岸部分の階段などに両者の違いが分かるだろう。しかし、このデザインの選択は、それだけの理由で為されたのではない。そもそも船着場がどれだけ使われるのか、両者のデザインの違いはその認識の差異でもある。残念ながら、この船着場は現在ほとんど使わ

れていない。この企画が国主導であり、船下りの運航者からのものでないあたりに当初からそれは予想されたと言えるだろう。しかし、筆者も、委員たちも、事業中止を求めるのではなく、「隙間をうめるデザイン」で対応したわけである。では、この判断は正しかったのか。読者の皆さんはどうお考えだろうか。



写真10 完成した川前船付場

### 4. 山形市立第一小学校（1997年～）

昭和2年竣工の山形市立第一小学校は、東京の震災復興小学校の影響を受けながらいち早く地方都市に建築された名建築である。また、当時の市歳入の6割近くに当たる建設費を掛けて建築され、竣工後はまず全国産業博覧会場として使われるなど、山形市史の上でも記念的な建築であり、平成13年には国の登録文化財となった。そして、昨年末には山形市中心市街地活性化基本計画で3つの新名所の1つに位置づけられるに至っている。この山形市立第一小学校の保存再生を、「隙間をうめるデザイン」という視点から考える。

#### （1）「隙間をうめるデザイン」としての保存

山形市には、昭和初めに竣工した鉄筋コンクリート造の小学校建築が3つあった。第一、第六、第七の3校である。これらは皆魅力的な建築で、第一小学校には表現主義、あるいは分離派の影響が認められ、また第六小学校は、建築史家山口廣が「みちのくのアールデコ」と高い評価を与えた建築であった。それに対し第七小学校は、前2者に見られる装飾性が後退して、初期モダニズムの

意匠が観察される。これらの建築は、すでに古典主義やゴシックの様式を纏ってはいないが、未だ無装飾の近代建築にはなっていない、そういう時代の建築であり、建築史上の価値も高いと考えられる。

このうち、第六小学校は平成9年に取り壊し、建て替えが行われた。筆者が新聞紙上でそれを知ったのは取り壊しが決まった後で、見学会とシンポジウムの開催、それに実測調査を行うことができただけだった。そこで次に危ないのは第一小学校であると考え、取り壊しが決まってしまう前に保存の声を上げなくてはと投稿したのが写真11である。



写真11 山形新聞に掲載された筆者の保存提案

当時もそして現在も、小学校校舎は耐用年数が来れば建て替える対象であり、文化財として見る発想は教育委員会にはなかった。それが保存されたのは行政の中に積極的に取り組んだ職員がいたからである。教育委員会管理課の栗原敏明氏が筆者の投稿を読み、研究室を訪ねてきたのは平成10年であったろうか。平成13年に教育委員会に呼ばれ、旧校舎は保存したいが地震時の避難施設としての耐震性を満たすのは難しく、そのために併設して新校舎をつくりたいと説明を受けた時は、すでに教育委員会内では保存の方向は決定していた。しかし、当時なお、PTAや同窓会、学区内の町内会などでは旧校舎を取

り壊して新校舎を建てる声があり、そのまま理解が得られたわけではない。

ここで、第一小学校校舎の保存を「隙間をうめるデザイン」という視点から見てみよう。通常は取り壊し建て替えられる校舎を保存したという意味で、保存に携わった行為は全て通常の手続きの「隙間」にあるものであった。しかし、その中でも、建物の所有者である山形市が保存の方針を出す前と後では「隙間」の性格が違う。市が保存を方針とする以前は、保存は進むべき道に異議を唱える行為であり、時により異端の色合いを帯びるものだと考えられる。筆者の提案にその心配はなかったが、取り壊しを進めることができたが通常の職務の教育委員会管理課で、逆に保存を推進した栗原氏と共に賛同した職員の行動には、こうした危険があったことも想像される。

それに対し、市が保存を決定したあとの作業は、「隙間をうめる」ものではあっても、それは前例のない作業の技術的問題であって質的に異なっている。平成13年に新校舎建設の基本構想をつくるために設けられた「山形市立第一小学校改築基本構想検討会議」は、後者にあたる。ただしここには、「隙間をうめるデザイン」という視点から見て興味深い点が幾つか見られるので紹介したい。まず、会議のメンバーであるが、そこにはPTA、同窓会、地元住民が入っている。山形市で行われる校舎建て替えでは、普通このように幅広い関係者を集めて議論するということはない。このような会議が持たれたのは、新校舎をつくるとはいえ、もともとグラウンドが狭く、旧校舎を取り壊して新校舎をつくって欲しいという要望もあり、関係者の合意を取り付けることが必要であったためである。開かれた形で事を進めたことは評価されよう。

次に挙げられるのは、メンバーに第一小学校の校長、教頭の2人の先生が入っていたことである。これは当たり前のように思われるかも知れないが、実は初めてのことであった。普通の場合、建設工事に当たるのはもっぱら教育委員会だからであり、現場の先生には完成した後手渡されるものだからである。

また、都合のつかなかった人を除くメンバー全員で、東京の小学校に事例視察を行ったこと、会議への予算措置は4月からであったにもかかわらず、メンバーの同意を得て2月から自主的に会合を持ったことなど、形式主義にとらわれることのない自由で実質を求める会議で

あった。おそらくそこには、「隙間をうめる」という行為が関係していたと言えるのではなかろうか。「隙間をうめる」テーマが、常態化のなかで陥りやすい形式主義とは逆の、自由な進め方を可能にしたように思われる。

なお、第一小学校旧校舎は、利活用の具体化に向けた動きがこれから本格化するところであり、現在も進行中である。将来別の機会に、その後の報告をしたいと思う。



写真12 旧校舎（手前）と新校舎（奥）



写真13 旧校舎と新校舎のあいだに設計された中庭

## (2) サイトプランと中庭

すでに述べたように、山形市立第一小学校は、旧校舎を保存する一方、新校舎を建設した。そこで現在は、写真12のように、旧校舎と新校舎が一体となった複合建築となっている。そして、新校舎と旧校舎の間には写真13の中庭が設けられ、複合建築の中心となっている。建築が敷地単位ごとにスクラップ・アンド・ビルトを繰り返し、一向に都市としての成熟を見ない我が国の現状に対し、ここでは都市と建築の別の在り方を示すことができたと思う。基本構想のワーキングを担当して新校舎の配置を考える中で、たんに両校舎の足し算としてのサイト

プランでなく、両者の複合からそれ以上のものを生み出すことを目標とした者として、この中庭は重要な設計テーマであった。図3は、ともにワーキングを行った香川浩氏の作図による中庭の検討である。

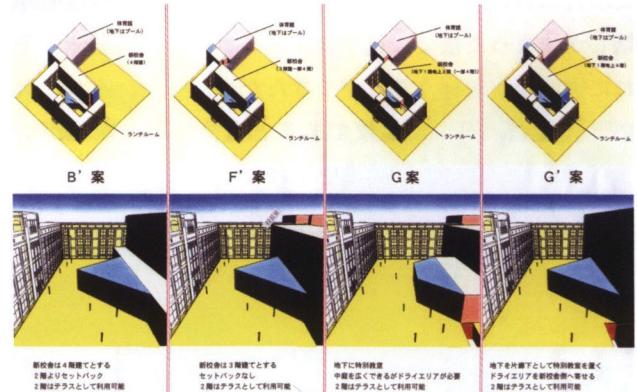


図3 中庭の検討 (作図: 香川浩)

さて、小学校の建設では、建築事務所に校舎の設計が発注されるが、サイトプランを練る作業、外構・校庭の設計、そして今回のような中庭のデザインが考慮される仕組みは現行制度のなかにない。したがって現状では、「隙間をうめるデザイン」としてしか行えなかつたことを言い添えておこう。

## 5.まとめ

東北芸術工科大学の大学院棟設計では、サイトプランニングの問題を扱っている。高さの問題、群としての造形も広い意味ではサイトプランに含まれる。キャンパス内であれば、やる気があればできるのだが、これがもっと小さな一般の敷地であると難しい。我が国の場合、敷地単位ごとに計画、設計、売買され、その独立性が極めて高いため、周囲と一体となった全体としての環境や美しさがなおざりになっている。したがって、個人の努力では如何ともし難い。強いてどうにかしようとすれば、その隙間をうめる以外にない。大学院棟の設計では、高さの問題としてだけキャンパスの周囲の集落との関係を扱った。

また、全体の環境や美を強調されると設計の自由がなくなり、無味乾燥な街にかえってなるのではという意見

もあると思うが、その点については石彫棟の設計で答えられたのではないかと思う。初めから外見の造形性に走らずとも、使用者のことを考えて進める中で、自ずから外側にも特徴が現れるものだ。

川前の船着場では、建築と建築との関係ではなく、船付場と風景という関係を扱っている。隙間を埋めるというタイトルは、個々バラバラに建てられた建築間の隙間をうめるという意味で現状に対する悲観的な気持ちを含んでいるが、川前の場合、風景と不釣り合いな船着場は避けられたと思っている。したがって、物理的な物としてバラバラにはならなかったわけである。したがって、これを「隙間をうめるデザイン」と呼ぶのは、ハードに関しては相応しくない。しかし、それでもなお「隙間をうめるデザイン」なのは、ソフトの方、その実現の方法が隙間としか呼べない方法だからである。

第一小学校の事例では歴史的建築を扱っているが、これは「隙間をうめる」という行為を、時間軸に沿って展開したと考えると理解できる。建築が、壊しては建てるという繰り返しであるうちは、有機的な連鎖を持った市街は形成されない。建築が保存され、長く使われるようになって初めて成熟した市街が形成されるからである。こうして見ると、前の2つの事例でも、既に存在する建築、既に存在する風景を重視することが出発点になっており、同一の構えであることが分かるだろう。

そして、この事例では、ソフトの部分、どのように保存という方向に転換したかということが重要になっている。今回、本稿を用意するにあたり、「隙間をうめるデザイン」という概念を思いつき、それを使ってまとめながら改めて考えたことであるが、この隙間をうめるという行為は、その性格上具体的に実践すると、頼まれないのに提案する（新聞投稿）、横から割り込む（大学院棟）、頼まれたことを越えた提案をする（船着場）という行為となる。しかし、これは案外本質のことではないか。

物事は何でも時を経ると硬直化する。時を経ないでも、そもそも社会とは因習的になりがちである。芸術でも学問でも経済でも、場が確立して方向が定まったところで洗練化が行われ、発展が起こり、拡大生産が行われる。しかし、そのときその発展は内部的なもので、既に硬直化も同時に進行している。そうしたとき、隙間が重要なとなる…。ちょっと、飛躍しすぎたかも知れないが、冒頭で言いたかったのはそうしたことである。

さて、我が国において都市や風景の美しさを実現するためには、以上のような「隙間をうめるデザイン」が、まさに隙間をうめる形で偶発的に行われるのではなく、制度的に確立され、個別のデザインを調整し、総合的全体的な視点からデザインする作業が、事業に不可欠なものとして恒常的に行われるようにならなければならない。そして、その担い手がきちんと位置付けられなくてはならない。

しかし、そのような場の確立とは逆に、新しく必要とされるものは、常に「隙間をうめる」形でしか存在しないだろう。ただ、これはもちろん別の次元の話である。

## 注と参考文献

- 1) 編集・饗庭伸 (2006)『都市建築のビジョン—都市建築の発展と制御シリーズI』日本建築学会
- 2) 編集・風見正三 (2007)『緑地・公共空間と都市建築—都市建築の発展と制御シリーズII』日本建築学会
- 3) 編集・温井亨 (2007)『都市建築のかたち—都市建築の発展と制御シリーズIII』日本建築学会
- 4) (1993)『造園雑誌VOL.56 NO.4』日本造園学会
- 5) 山形市教育委員会 (2001)『山形市立第一小学校校舎等改築基本構想』
- 6) (1997) 山形新聞夕刊 7月4日
- 7) 山形市商工部 (2008)『山形市中心市街地活性化基本計画』

## 付記

本稿は、平成20年度日本造園学会東北支部大会（8月30日、青森大学）のポスターセッションで発表したものと論文としてまとめ直したものである。

## 執筆者

温井 亨  
NUKUI Toru  
デザイン工学部 建築・環境デザイン学科  
School of Design / Department of Environmental Design  
准教授  
Associate Professor